

山村の学校を訪れて 三好 章

今年（一九九七年）八月十六日から二十四日にかけて、「中国山地教育を支援する会」に同行し、河北省興隆県のいくつかの小中学校を参観する機会を得た。全日程九日間のうち、興隆県内での六日間は初めてのことがばかりの連続で、本当に貴重な体験をした。ここでは、その思い出話めいたことを記しておきたい。興隆県や北京での教育関係者へのインタビューなどについては、別稿を用意したい。

興隆県は河北省の東北部に位置し、万里の長城を南と西の県境としている。県境付近には最近では長城観光の名所となりつつある金山嶺などが北京との公路沿いにある。県内を承德にゆく鉄道が通っており、北京との交通もかなり便利である。また、ここ興隆県は日本でもおなじみの「天津甘栗」の原料である「京東板栗」の産地であり、燕山山地丘陵区に含まれる、平均海拔千メートルという全体に山がちで、全国でも貧困区に分類される山地農業を中心とした県である。歴史的に見れば、清朝の頃は東陵後方の地として「后龍風水禁地」とされ、一般人の立ち入り



現在の興隆県

が禁じられていたところであり、近代では、日本軍の熱河作戦で「満洲国」の熱河省に組み入れられた地域である。そこは、日本軍によ

って「無人区」化されたところであり、「三光作戦」が典型的に繰り広げられたところであった（姫田光義・陳平著丸田孝志訳『もう一つの三光作戦』青木書店、一九八九年）。

出発前、千メートル以上の山がたくさんある山区に行くとの話であったので、日本なら軽井沢か那須高原、あるいは白樺湖にでもゆくつもり、夜は冷え込み、昼はさわやかなそよ風を予想していた。ところが、気温は連日三十度以上、その上雨が降ったのは日程の中でただの一日。帽子なしではいられない毎日だった。ずっと同行してくれた副隊長の孟さんによれば、七月中旬に一度降って以来の雨だとのこと。地面は乾ききり、舗装していない「公路」は、車が通る

度に土埃が舞い上がる状態であった。そして陽射しは、陳腐な表現だが、文字通り刺すようにきびしかった。

さて、「中国山地教育を支援する会」は、宋慶齡研究で知られる仁木ふみ子さんを中心に小中高大の教員や研究者、出版関係者などを世話人に、一九九一年九月、「中国人労働者を悼む会」として発足した。この会が悼む「中国人労働者」とは、関東大震災の時虐殺された中国人労働者のことで、これに関しては仁木さんの『震災下の中国人虐殺——中国人労働者と王希天はなぜ殺されたか』（青木書店、一九九三年）が詳しい。

仁木さんの研究では、当時殺された中国人のほとんどすべてが浙江省温州の山区の出身であった。そして王希天という、救世軍の山室軍兵と親しく、メソジスト教会の代理牧師をつとめた当時二十七歳の中国人留学生クリスチャンであ

り、僑日共済会会長として普段から中国人労働者の賃金不払いに対する抗議運動などしていた人物が、そうした同胞の安否を気遣って搜索活動をしている最中に、江

区大島で殺されたというのである。王希天は、南開中学出身で、周恩来とも同級であったという。この近代日本の歴史の暗闇にスポットをあてるなかで、そうした大きな人的物的被害を与えた中国に對して、草の根レベルでできる

歴史の償いをしようということから始まった。そのため、これからの時代を担う子供たちによりよい教育環境を整える手助けをしようとして、「中国山地教育を支援する会」に改称したのである。会では、これまで以外務省の小規模無償援助資金や郵政省の国際ボランティア貯金から資金を得て、温州の中学校に寄宿舎を建設したり、ミシンなどの教材を送るいっぽう、河北省興隆県へも同様に中学寄宿舎建

設、小学校への教材寄贈などの活動を行ってきた。九七年の今回は、興隆県の中学寄宿舎建設状況を郵政省に報告することも目的の一つであった。

「中国山地教育を支援する会」一行は、成田発グループ十三名と、福岡発グループ十一名の合計二十四名。ほとんどが、小中学校の現職教員であり、鍵盤ハーモニカ（ヤマハの商品名「ピアノカ」・算数セット・顕微鏡などの教材を届け、その使い方を、日本風に言えば「研究授業」で中国の教員に伝えることを目的としていた。訪れる小学校のすべてで、音楽と算数の授業が組まれていたのである。私は日中戦争をふまえた日中関係についてのアドヴァイザーとして参加し、授業を参観させていた。大きな山、山区教育の実態を見学し、同時に日本軍による三光作戦の痕を確かめようと思っていた。

八月十六日、成田と福岡から北

京空港に着くと、そこでまず一悶着起こった。我々が持参した教材のうち、顕微鏡と鍵盤ハーモニカについて海関の役人が、これは輸入であり関税を支払わなければ持ち込ませぬと言いついたのである。興隆県の副県長孟さんが出迎えにきてくれたのだが、あか

ない。県政府の証明ではだめで、省政府の証明を持ってこいというのである。しかも、北京にある河北省政府の出張所ではだめで、石家庄の本庁のものでなければ通さないの一点張り。我々が着いたのがすでに土曜の夕方六時過ぎ。どうにもならず、顕微鏡と鍵盤ハーモニカの大部分は保税倉庫行きとなってしまった。限られた日程で行動しなければならぬ我々としては、事後の措置を興隆県政府に任せ、持ち込めた算数セットと若干の鍵盤ハーモニカをみんなでトラックに積み込み、県政府が用意したマイクロバスで興隆県に向か

った。途中午後九時三十分、密雲で遅い夕食をとり、興隆県招待所にとどり着いたのは日付が変わるうかという頃になっていた。

翌日から、七時に朝食という日頃の生活とはかけ離れた健康すぎるほどの時間に、毎日の行動が始まった。基本的には一日に一つの郷の小学校へゆき、授業をした後、午後はその郷の小中学校の教員と交流するというプログラムであった。山区ということで、移動に時間にとられるため、早朝出発となったのである。学校によってそれぞれ違いはあるが、共通していたものに、我々を歓迎するやり方があった。どこの村の学校でも、村の入り口近くから、とても普段着とは思えないバリッとした服を着た子供たちが列を作って待ちかまえて、「熱烈歓迎、熱烈歓迎」と大声を張り上げて拍手、楽隊はトラックを吹いたり太鼓を鳴らしたり。校庭に入れば、「熱烈歓迎日本教



校庭に並ぶ子供たち

育考察団」の張り紙。我々の本来の団名は何だったのか、と思わず考え込んでしまった。それにしても、この熱烈歓迎ぶりはいったいどうしたことなのだろうか。私が初めて中国を訪れたのは、一九七七年八月。華国鋒時代であった。その時は特に長春・吉林・瀋陽とその近郊の人民公社や工場で子供たちが「熱烈歓迎」をしてくれたのを、はつきりと覚えている。文革期には、中国での外国要人の出迎えシーンなどが日本でもしばしば放映され、そこでは着飾った子供たちが踊る中をエライさんが歩いて行くものだと思っていた。これは、外国から来た人たちを迎える儀礼であると説明されると、甲子園での人文字と同様に、統制がききすぎるほどに同じ行動をとる集団には違和感を覚えながらも、文革中国、あるいは社会主義とはそうしたものと、割り切ろうとしていたことを覚えている。その後、文革が全面的に否定され、中国がごくふつうの国になってゆく過程を見ていると、もうあのような「熱烈歓迎」する習慣は過去のものとなってしまう、もはや外国人である我々がそうした「熱烈歓迎」を受けることはあるまい、と思いついでいたのである。それなのに……。しばらくは、時間が止まっていたところに迷い込んだのか、それとも自分たちがタイムスリップしてしまったのか、と驚いていた。正直なところ「まいった」。うまく説明できないがどうにもこそばゆくて居心地が悪く、炎天下で「熱烈歓迎」してくれている子供たちが、けなげに大人たちの指示に従っているだけ、よけいにかわいそうだった。文革の頃の親中国派なら、そうした「熱烈歓迎」こそが友好人士に対する革命的出迎へと考えたであろう。そして、そこに居心地の悪さを感じる者の方が、友好に対しても、革命に対

しても態度が不鮮明な「遅れた」者たちと見なされることがしばしばであった。

さて、最初に訪れた、大水泉郷中心小学での様子を書いてみよう。大水泉郷は県城の興隆街から車で二時間ほど。山の中の細い道を、高粱畑をあちこちに見ながら、ようやくたどり着いた。そこでの出迎えも「熱烈歓迎」だった。我々は村の入り口で車を降り、自分たちも拍手で「熱烈歓迎」に応えながら、子供たちと村人が両側に立つ道を小学校へと歩いた。学校でも、校門から控え室となった教室まで、子供たちが作る列の間を歩かなくてはならなかった。

一時間目の算数の研究授業が行われる二年生の教室に行くと、子供たちが制服だという真新しい上下のジャージ（日本の公立中学校に多い姿）を着て、椅子に座っていた。ところが、その椅子が小さな平均台といった方が適切なほ

ど、細い板と足で出来ていた。いくら小学生でも、お尻が痛そうだった。一人一人に日本から持ってきた算数セットを配った。小学校一年生に入ると、学校でまとめて買い、小さな数え棒や紙の三角四角形に至るまで全部に名前を書いてくるようにと受け持ちの先生から言われる、あれである。この算数セットを中国の子供たちに配る際には、日本で一回役目を終えたものを集め、中身を点検して持参したはずであった。それでも、子供たちからは、中の時計（今回の算数の授業は、時計の読み方と時間）の色が違う、数え棒が足りないなどなど、ふたを開けたとたんに大騒ぎ。それこそ、蜂の巣をつついたようになった。日本の子供が使ったものを、お下がりのように中国の子供たちに渡すのには抵抗を感じる向きもあるかもしれない。できれば、我々も新品を渡してあげたいのだが、先立つもの



算数セットにわくわくどきどき

の都合で仕方なかった。日本の子供の名前がすべての中身にひらがなで書かれてあるものを見ると、多少複雑な気持ちになった。

授業では日本から持ってきた絵を黒板に張り付け、時計の針を進めさせるといふものであった。朝六時に起き、顔を洗い、とこまでは授業をする大分から来た小学校の先生にとつて不安はなかったのだが、次のシーンについては前日不安を持っていた。六時三十分

に犬を散歩させる、とあったのである。はたして、中国の農村に犬がいるのか、いても子供たちが散歩につれて行くのか……。ところが、子供たちの顔には意外なものを見たとの表情は浮かんでこなかった。話を聞いてみると、一クラス三十人ほどの教室の子供たちのなかで、犬を飼っている家が半分近くに上っていた。これで、第一

関門突破。そのあとは、時間の表示を日本の漢字で書いてしまったため子供たちがわからなかったり、といった小さな問題はあったものの、つづがなく進んだ。

二時間目は三年生に鍵盤ハーモニカを使って、音楽の授業。中国では現在も五線譜は一般的ではなく、数字譜を教育現場でも用いている。音楽教育史の方に教えを請わねばならないことであるが、日本でも戦後しばらくまでは五線譜の下に数字譜が書かれていた譜面があったことを記憶している。数字譜とは、1をド、2をレとして7がシとなる。半音進行は数字の前にシャープやフラットをつけて表現するもので、1||Cと最初に表記することで、その曲の調子を設定する。ちなみに1||Cならハ長調。そして、音の長さは数字の下に線が一本あれば八分音符、二本なら十六分音符、三本では三二分音符、何もなければ四分音符という約束。オクターブ上なら、数字の上に点を一つ付けて表記し



私にも
見せて見せて

中古ラジカセにコードをつないで、外部スピーカーに接続してあるだけ。当然、気の毒なくらい音が貧弱で悪い。最初の出し物では、子供たちが踊り出したら、テープが若布わかふになってしまつて、音がふにやふにや。結局、その出し物は飛ばされてしまった。子供たちが熱心なものをさることながら、校庭の外は村の人でいっぱい。学校側は校門に錠を下ろしているため、中に入つてこられない。そこで、屏によじ登つたり、隣の家から覗いたり、はては学校の裏手の丘に登つたり。小説『しろばんば』に描かれた運動会や、映画『無法松の一生』の学芸会のシーンを彷彿とさせた。おそらくはまだ娯楽が不足している山地の農民にとつて、外国人がきただけでも珍しいのに、その外国人相手に村の子供たちが演技をするのであれば、これは見逃してなるものか。当然である。さらに、子供たちの出し物

が一段落すると、我々にも何かやれとの要請。一行の中に高校の体育科の教員がいたので、彼女の発案と指導で「ジエンカ」をまず我々みんなで踊り、そして子供たちを誘つた。いまさら「初めてキスをする」などという歌詞は、聴いているだけで恥ずかしかつた。もっとも、これも村人からすれば傑作な出し物であつたに違いあるまい。

いろいろな行事が終わり、子供たちを家に帰してから、その小学校の教員に加えて、近くの初級中学の教員との交流会が持たれた。日本の教員による研究授業形式の授業については、子供たちへの発問とそれに対する子供たちの応答の活発さに関心が集まつた。できる子供たちを集めた教室だったのであるが、私も授業を参観させてもらつて子供たちの反応の良さに感心していた。ところが、それに中国の教員が感心するとは、普段

の授業の状況がかえつて見えてくるように思えた。実際、別の小学校で子供たちがいるのに教員がいず、自習状態になっているクラスがあつたとき、そつと入つていつて、一番前の子に教科書を朗読させようとしてみた。ところが、いきなり外国人にいわれたせいもあつたのだろうが、本当に蚊の鳴くような声で、たどたどしく読み始め、苦勞しながら一行だけ読んだ。教科書を見せてもらつと、拼音が振つてある。ローマ字を覚えるのが大変ということもあるが、教育現場の実態をかいま見た気がした。無理矢理立たせて、教科書を読ませってしまった男の子、ごめんね。

こうした授業と経験交流との組み合わせを三回行い、興隆県での日程が過ぎていった。

日程では、その後承德で清朝の離宮を見学し、北京へは完全に舗装された有料公路を通つて戻つ